

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2022

課題番号：15K01990

研究課題名（和文）近代ロシアにおける存在論的言語哲学の研究

研究課題名（英文）Study on Ontological Linguistic Philosophy in Modern Russia

研究代表者

大須賀 史和 (OSUKA, Fumikazu)

横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・教授

研究者番号：30302897

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：この研究では、ロシアの哲学者ローゼフが1920年代に論じた、言語や表現についての議論を検討しました。これは一般的な言語哲学や美学とは異なる観点を持つもので、ローゼフによれば、名や言葉はそれが表す対象と結びつけられた単なる記号ではなく、様々な側面からの対象の意味や理解を包含する存在と考えられています。このような思想の根源を探り、プラトン哲学や音楽などの芸術的な表現形式などと強い関係の中で生じた考え方であることを明らかにしたことが主な成果となっています。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ローゼフの議論は西洋文化が長い歴史の中で育んでいた様々な思考の形、例えば古代ギリシアの哲学や中世のキリスト教神学などで展開された対話的な論理や、数学、さらに近代的な芸術論などと強い関連を持っています。その内実を深く検討することで、西洋文化の歴史的な成り立ちと、そこに内在する論理を1つの角度から明らかにできると考えています。それは人間の思考がどのような可能性を持っているかという問題とも関連するため、例えば今後の人工知能のあり方をめぐる議論にも大きな示唆を与えることができると考えています。

研究成果の概要（英文）：In this research, we examined the discussions on language and expression conducted by the Russian philosopher Losev in the 1920s. His perspective differs from the commonly held views of philosophy of language and aesthetics. According to Losev, names and words are not mere symbols, but rather entities that encompass a diverse range of meanings and understandings derived from various aspects of the objects. The main achievement of our research is to explore the roots of such thinking and to elucidate its strong relationship with his research on Platonic philosophy and artistic forms of expression such as music.

研究分野：哲学

キーワード：ロシア 言語哲学

1. 研究開始当初の背景

19世紀以降の近代ロシア哲学においては、言語をめぐる諸問題を主題として論じた事例はさほど数が多くないが、20世紀初頭のロシアにおける神学的論争の一つ「讃名説論争」を契機として、一部の宗教哲学者が名や言葉の問題に関心を示し、これを「名の哲学」という極めて独特な言語論として展開していたことは知られており、近年この問題に多くの研究者が注目していた。本研究で取り扱ったローセフの議論もその一つであり、1991年のソ連崩壊後に多くの業績が公刊されたこと、また内容的にも非常にユニークな議論が行われていることなどから、その内実を明らかにする本格的な研究が世界で進められる状況があった。

ローセフの議論は主要なところではプラトン主義的な弁証法論理やフッサール現象学、ロシア文学などで探究されていた象徴主義などの多様な構想を源泉とするものであることはすでに明らかであったが、言語哲学的な議論の詳細を見た場合に、既存の言語研究に新しい視点をもたらさうかという点ではまだ検討の余地があった。

2. 研究の目的

本研究では、ローセフの構想を存在論的な言語哲学として捉えつつ、そこでの意味論において重要な概念である「エイドス」や対象性の概念、そしてそれらが静態的なものでなく、自己産出的な動態性を持つとする議論などの意義を明らかにすることを目的とした。この動態的な本質という観点はローセフの議論の主要な特徴の一つであり、この動態性があることで言葉は多様なコミュニケーションへと開かれ、ひいてはコミュニケーションが生み出す社会性や公共性などの問題圏へと接続されうとも考えられた。それと同時に、言語の中に対象性を置く構成がとられることから、言語的な規範性が対象となるもの存在としてのありように関連すると考えられる可能性があった。こうしたことから、ローセフの議論は言葉が対象を表示する記号として機能するという言語哲学の根本的な理解を保持しつつも、より広い問題圏を射程に入れるものであると見込めたため、それらの論理的枠組みなども含めた全体像を検討することが必要であると考えた。それにより、ローセフの議論が言語哲学としていかなる妥当性と展開可能性を持つかを明らかにしていくこととした。

3. 研究の方法

研究方法としては、文献学的なアプローチを主体としつつ、様々な形での各国の研究者との討議を通じて多様な知見を取得し、ローセフの議論の内実を明らかにすることとした。ロシアの図書館等にはローセフ自身が残した著作や論文等が大量に保存されているが、日本では入手が必ずしも容易ではないことから、現地の研究者の支援を得て必要な一次資料を入手した。また、関連する研究文献などの二次資料も多くは海外の研究の手になるものであり、それらの情報もロシアの研究者が網羅的に収集していることから、そこで必要な情報を得て、適宜参照するなどした。これらに依拠して、ローセフのテキストの読解と分析を行うという方法をとった。

4. 研究成果

この研究を通じて、ローセフにおける「エイドス」と対象性の概念は多面的・重層的な意味と理解の構成物として客観的かつ動態的に措定されるものであること、そしてそうした意味や理解の多面性・重層性が多様な言語表現に見られるような他の要素との結合性の源泉となりうる

こと、さらに言語の中にある対象性が自己規定的に再帰することで言語的な規範性へつながりうること、これら一連の議論がプラトン主義的弁証法を用いた演繹的な論理によって構成させると考えられていたことなど、ローセフの言語哲学の主要な部分について一定の理解を得ることができた。

また、ローセフの学的なアプローチは言語のみならず、音楽などの芸術的表現を理解する枠組みとしても適用されていることが明らかとなってきたため、今後は言語哲学という領域にとどまらず、広く「表現」を理解するための哲学的枠組みとしてローセフの議論を捉えるような研究へ発展させていくための基盤が得られたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名	4. 巻 12
2. 論文標題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ロシア思想史研究	6. 最初と最後の頁 31-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大須賀史和	4. 巻 7
2. 論文標題 初期ローゼフ哲学における主体をめぐって	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ロシア思想史研究	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 6
2. 論文標題 " "	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 ロシア思想史研究	6. 最初と最後の頁 31-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 大須賀史和
2. 発表標題 ローゼフの音楽論における「論理」と「神話」
3. 学会等名 日本ロシア思想史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 XVII (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大須賀史和
2. 発表標題 1910-1920年代におけるローゼフの学的構想をめぐって 古典的世界観と数・音楽の神話
3. 学会等名 日本ロシア思想史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大須賀史和
2. 発表標題 ローゼフの生涯と思想史的位置をめぐって
3. 学会等名 日本ロシア思想史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大須賀史和
2. 発表標題 ローゼフの哲学的構想における古典学と音楽
3. 学会等名 日本ロシア思想史学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 XX : (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大須賀史和
2. 発表標題 ローゼフにおける古典研究と哲学的構想について
3. 学会等名 日本ロシア思想史学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大須賀史和
2. 発表標題 " "
3. 学会等名 第9回 国際中欧・東欧研究協議会世界大会 (国際学会)
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------